

参加者の声から

基調講演

- ・安全をつくるにはコミュニティをしっかり形成することが大事という話に感銘。
- ・復興についてのプロセスや考え方が学べた。

実践報告

「人をつなぎ・地域をつくる社会教育関係職員の取組」

- ・社会教育主事として、地域と行政、地域住民同士のつなぎ役としてのご活躍がよくわかりました。
- ・自らも被災しながら、社会教育の事業を進めていったことに心打たれました。
- ・災害時でもスピーディな対応(ニーズの把握)がすばらしい。
- ・中央公民館の決断の早さに感動。
- ・改めてボランティアの方々の素晴らしさを感じた。
- ・絵本を被災地に届ける活動を4人の事務局の方とボランティアの方のみで行った実行力がすばらしいと思いました。
- ・公民館の役割の再確認、および支えるボランティアを束ねるリーダーの役割が重要だとわかった。

実践報告

「空間・時代を超えてつなげる民間の取組」

- ・古文書の保全是未来につながる大切な責務であると実感。
- ・災害を予測するのに古文書が有用であることを初めて知った。
- ・希望者のニーズを受け入れながら事業を展開するバイタリティに感銘を受けた。
- ・「子どもを支援することで大人や地域が変容する」に共感した。

シンポジウム

「これからの地域社会とボランティア」

- ・企業の社会貢献について、これほどまで考えてやっているのかということを実感。
- ・学生がボランティアに積極的にかかわっている姿に大変感動。
- ・困っている方がいたら即行動というその行動力がとてもすばらしいと思いました。

セミナー全体

- ・災害時のボランティアは避難所から古文書まで、こんなに幅広いとは思ってもみませんでした。
- ・活動のコーディネートをとれる人材の育成についてヒントをもらった気がします。

平成23年度 地域教育力を高めるボランティアセミナー ～東日本大震災と地域社会～



セミナープログラム

- 基調講演 9:50～10:50
3.11から何を学び、伝えるか～わたしたちができること
- 実践報告 11:00～12:40
人をつなぎ・地域をつくる社会教育関係職員の取組
・宮城県女川町教育委員会
・3.11絵本プロジェクトいわて事務局(盛岡市中央公民館)
- 実践報告 13:30～15:10
空間・時代を超えてつなげる民間の取組
・NPO法人宮城歴史資料保全ネットワーク
・ふくしまの子どもを守ろうプログラム実行委員会
- シンポジウム 15:25～17:25
これからの地域社会とボランティア



Lunchtime いざという時の備え

・台東区の協力で、災害時備蓄食糧(おこわとけんちん汁)の調理・試食を体験しました。

おこわのつくり方
お湯を入れてまぜると、
約20～30分で温かい
おこわのできあがり!
1箱50人分です。



備蓄食糧ってどんなもの?

震災関係資料コーナー

参加者の皆さんへ様々な関係資料の
情報提供をしました。



期日：平成24年3月2日(金)

会場：国立教育政策研究所社会教育実践研究センター

東日本大震災を通じて、改めて人と人とのつながりや地域の絆の重要性が見直されています。本セミナーには、復興に向けて一歩ずつ着実な歩みを続けている被災地の方々、地理的・時間的な制約を越えて復興を支援してきたの方々、今後の復興に向けて自らの関わり方を模索するの方々、約120名が全国から集まりました。各々の経験や思いを共有し、これからの地域社会とボランティアについて協議を深めました。

3. 11から何を学び、伝えるか～わたしたちができること(基調講演)

想定外に対応するためには、コミュニティを重視した地域の基盤が重要。
 関西学院大学教授 室崎 益輝
 (内閣府中央防災会議専門委員会委員)

- ・災害に対処するためには、危機を想定し、その備えをすること。それと同時に想定外が起こった時への「クライシスマネジメント」が大切。そのためには人と人とのつながりなどのコミュニティがしっかりしていることが基盤。
- ・防災教育は「How to」を教えるのではなく、自分で考え判断できる力を育てることが大事。



つながる！民間の取組(実践報告II)

古文書に地域防災のヒントが！

NPO法人宮城歴史資料保全ネットワーク理事長
 東北大学教授 平川 新

- ・古文書は、昔の災害の歴史を今に伝えるタイムカプセル。
- ・個人宅に眠る江戸から明治の貴重な資料を、100年後、200年後に生きる資料として保存することは、防災対策にも寄与。
- ・江戸時代の塩田開発は産業振興というより、津波のあとの田を活用する先人たちの知恵と災害復興への願いの結晶。
- ・古文書の整理修復は体力のないお年寄りになどでもできるボランティア活動。



子どものためにできること～願う大人の想いをつなげて～

ふくしまの子どもを守ろうプログラム実行委員会副委員長
 NPO教育支援協会代表理事 吉田 博彦

- ・福島在住の子どもたちを対象に、自然体験活動の場を全国で展開(北海道、横浜、愛媛等)
- ・子どもたちを受け入れることで、大人が福島の問題を自分のこととして実感。
- ・子どもたちのためにできることをしたいと願う人々の想いをつなぐことで、地域行事の復活等、受け入れ地域にもメリットが。
- ・受け入れ地域の大人同士の協力から生まれた心の変容により「地域づくりの“源(もと)”を動かす」ことができる！



現場レポート(実践報告I)

個から輪、そして集団、チームへ

宮城県女川町教育委員会生涯学習課
 派遣社会教育主事 色川 洋二

- ・4階建ての生涯教育センターも屋根まで浸水。屋上の5階の機械室に28名と取り残された。
- ・復旧、復興については生涯学習課が2,500名収容の総合体育館の運営を担当。
- ・まずは人間関係(避難者同士、避難者と職員)づくりから。心と体の安全確保を。(寄り添うことで現場のニーズ、信頼関係)
- ・被災者からの申し出で、部屋ごとに「班長」「食事当番」「清掃当番」「自主警備隊」を組織。徐々に住民ボランティアの輪～個から輪、そして集団、チームへ～
- ・「ちゃっこい絵本館」の開設
 支援で届いた本による「集まる場」づくり。「配れば本はなくなる。本があれば人が集まる」



公民館は地域に頼りにされる存在

3.11絵本プロジェクトいわて事務局長
 盛岡市中央公民館主幹兼館長補佐 赤沢 千鶴

- ・3月24日にプロジェクトスタート。公民館が中心となりNPO・ボランティア団体と連携し、絵本の寄付を呼びかけ、避難所、仮設住宅、学校等へ配布。ボランティアによる読み聞かせも。
- ・5月20日の受け入れ終了までに約23万2,000冊が集まる。
- ・公民館が人と人をつなぎ、地域づくりを行う拠点であることを再認識。
- ・元に戻すのではない。新しい命を吹き込むのである。復興から新興へ、公民館の新たな出発である。被災地に寄り添い、できることを考え、活動を続けていきたい。



これからの地域社会とボランティア(シンポジウム)

【コーディネーター】神戸大学教授 松岡 広路
 【登壇者】
 ・富士ゼロックス株式会社CSR部長 澁谷 隆
 ・岩手県立大学准教授 山本 克彦
 ・公益社団法人セカンドハンド前理事長 新田 恭子

「企業が考えるボランティアに必要なものとは？」

- ・社会に関心を持ち関わっていこうとする「社会感度」が大切。社会に関わるワクワク感をいかに感じさせることができるか。

「被災地の外からの支援に大切なことは？」

- ・コーディネーターがいたから支援活動ができた。日頃からコーディネーターを育てること、他機関との連携を図ることが重要。

「ボランティア活動を推進するには？」

- ・学生や地域住民は、地域の課題を考えたり、地域とのつながりを模索したりする中で変わる瞬間がある。目の前の人や地域を信じて関わるのが大切。

「ボランティアと地域社会との関わりは？」

- ・いろいろなボランティアを許容できる社会は素敵。持続共生社会を実現していくことが求められており、復興を軸にした社会づくりにつながる。

